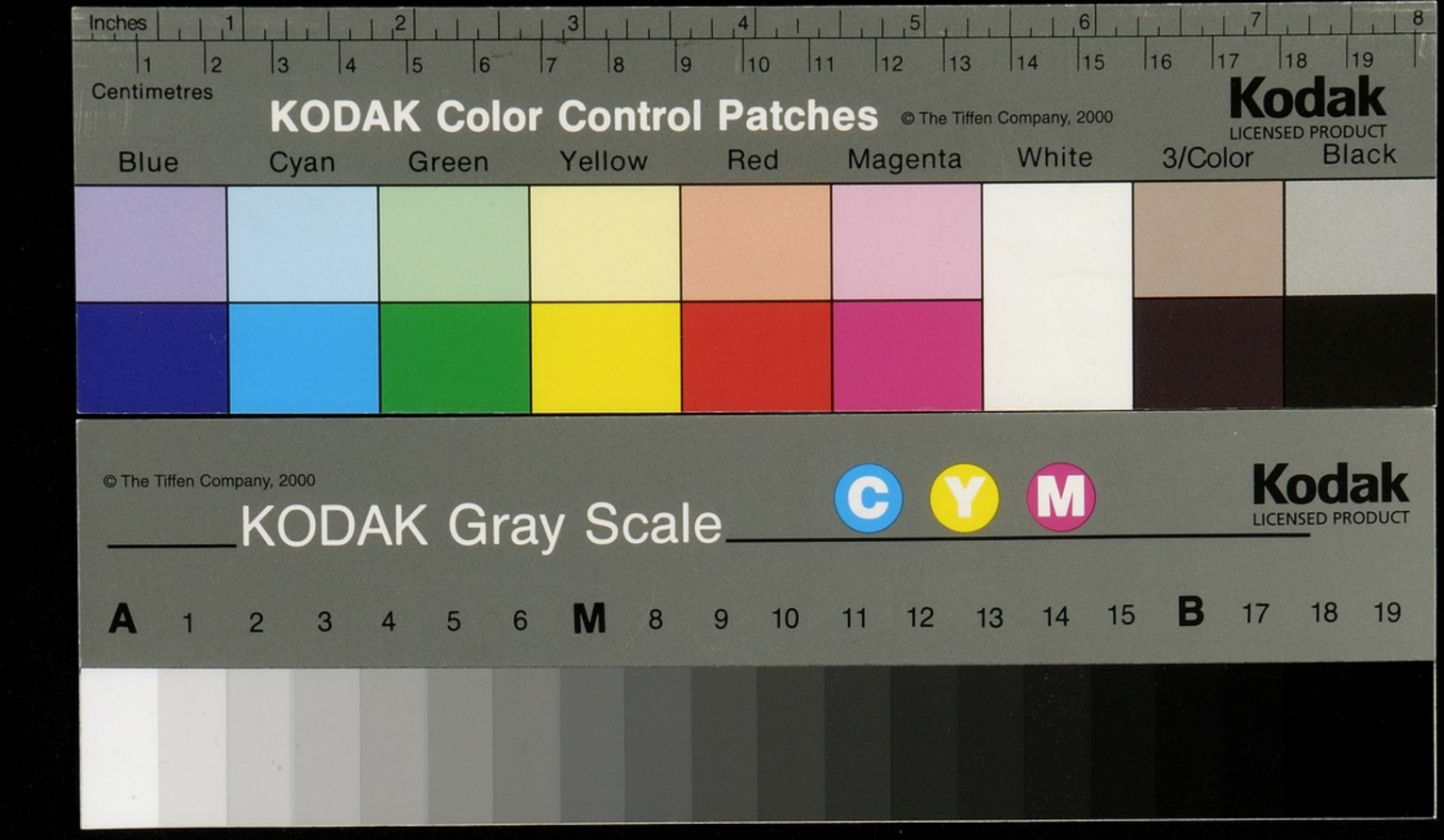

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A
M
B


0
50
100
150
200


椿說弓張月 後編 中

『椿說弓張月』殘編一

古城高聳白雲叢渺渺江天望不窮山色朦朧
朧檻外水光瀲灩映牕中遥憐大義千秋
隔更歎雄圖一旦空回首不堪頻借問野花
寂寞對春風　城頭一望尚巍然往事唏噓
獨可憐寒徑空飛霜後鳥荒臺幽鎖雨中烟
曾扶社稷聲名重更濟乾坤節義堅若問先
朝亡鼎恨從來但有失忠賢

楊文鳳自云城主毛國人罪者先朝之忠義也一旦為讒者被害國帶亡而不久先朝亦失焉

右琉球楊文鳳中城覽古詩

著作堂主人録

椙山女学園大学図書館



佳奇呂麻
嶋長林太夫



讃岐院の神使
九郎坊
為仲

悲歎雖爲人生事窮達難爭造化權

誠齋



中山王子

阿公



賤婦十歳

為子芳墳到碧岑西風颯々艸森々可憐夫婦千秋恨長使遊人泪滿襟

琉球楊経齋弔夫婦墓詩

紹南

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月殘編下帙目録

第五十七回
松山磯嶋長救夫妻

第五十八回
巴麻嶋為朝訪神仙

第五十九回
射飛鳥神童談兵

第六十回
姑巴嶋父子再會

第六十一回
貝爺舞天丸趣山北

第六十二回
造舟紀平治出孤島

第六十三回
秉燭山妻留客

第六十四回
穿壁三光刺源按司

第六十五回
沃淚為朝癒窣都婆

第六十六回
借劒樵夫供婦

第六十七回
城山中毛鶴張寃家

第六十八回
天孫廟阿公贄首級

第六十九回
推因談果解手刀

第七十回
剪頭髻舞天丸全孝順

第七十一回
發靈箭舞天丸射曚雲

第七十二回
龍宮城三賢述志

第七十三回
夫婦塚両児誕生

憐(あはれんで)苞苴(ほうそ)王女示寂(じゃくをしめす)

第六十八回

中山府舜天即位(ちゅうざんふしゅんてんそくい)

員外一條附錄(いんがいいちじょうふろく)

爲朝神社并南嶋地名辨畧(ためともじんじゃならびになんとうちめいべんりゃく)

統計一十二回殘篇下帙五冊の目錄終(とうけいじゅうにかいざんぺんげちつごさつのもくろくおわる)

全部五編二十八卷六十有八回條目盡于此矣(ぜんぶごへんにじゅうはっかんろくじゅうはっかいじょうもくことここにつきたり)

前編六卷十五回　後編六卷十五回　續編六卷十五回

拾遺五卷十一回　殘編五卷十二回

每編目次各出於簡端(まいへんもくじおのおのかんたんにいづ)

是書文化乙丑年春月初發硯同庚午夏日全結局(これしょぶんかきのとうしとしはるつきはじめはっけんおなじくかのえうまのなつひまったくけっきょくす)

聽童謠爲朝決別(わらべうたをきいてためともわかれをけっす)

祭神奏樂大團圓(かみをまつりがくをそうしてだいだんえんす)

殘編引用舊說崖略(ざんぺんいんようきゅうせつがいりゃく)

壽星老(じゅせいろう)　卽歌曲南嶋志云其曲則有王者國百花國爲人臣爲人子揚香壽星老上逢某等

紙糊福祿壽(かみばりふくろくじゅ)　中山傳信錄二卷云天妃宮前沼池內作假山作白鶴池上作大松一株立地中上亦作一白鶴如飛鳴相向狀四圍以紙皮作假山羅草花數十種圍之中作一老人二鹿如山呼祝壽狀此那

板舞(いたまい)　中山傳信錄二卷云女子於歲初有板舞戲橫臣板於木樁上兩頭下空二三尺許二女對立板上一起一落就勢躍起五六尺許不傾跌敬側也

多褹國（タネコシマ）益久人（ヤクヒト）即琉球又作多尼嶋按玖人見于日本紀。續日本紀。日本後紀。文徳實録。三代實録等。貴賀井嶌（キカヰ）即琉球。又作奇界見于東鑑。

神社（ヤシロ）南嶋志云。宗社之神者。伊勢大神祠自尚巢那之社。普天間之社。末吉之社。並皆奉祀熊野大神也。其始不詳云。菅神祠自久米嶋人林氏始。又有天妃天巽等祠。又浮圖法。唯有禪與密之三教耳。此餘古實若有管見。則引用以為闕典。今不遑枚擧臨編自見。

庚午仲春

曲亭陳人鮮甬識

鎮西八郎爲朝外傳 椿説弓張月 後編 巻之一

東都 曲亭主人編次

第五十七回

松山磯よ嶋長夫妻を救ふ
巴麻島よ為朝神仙を訪ふ

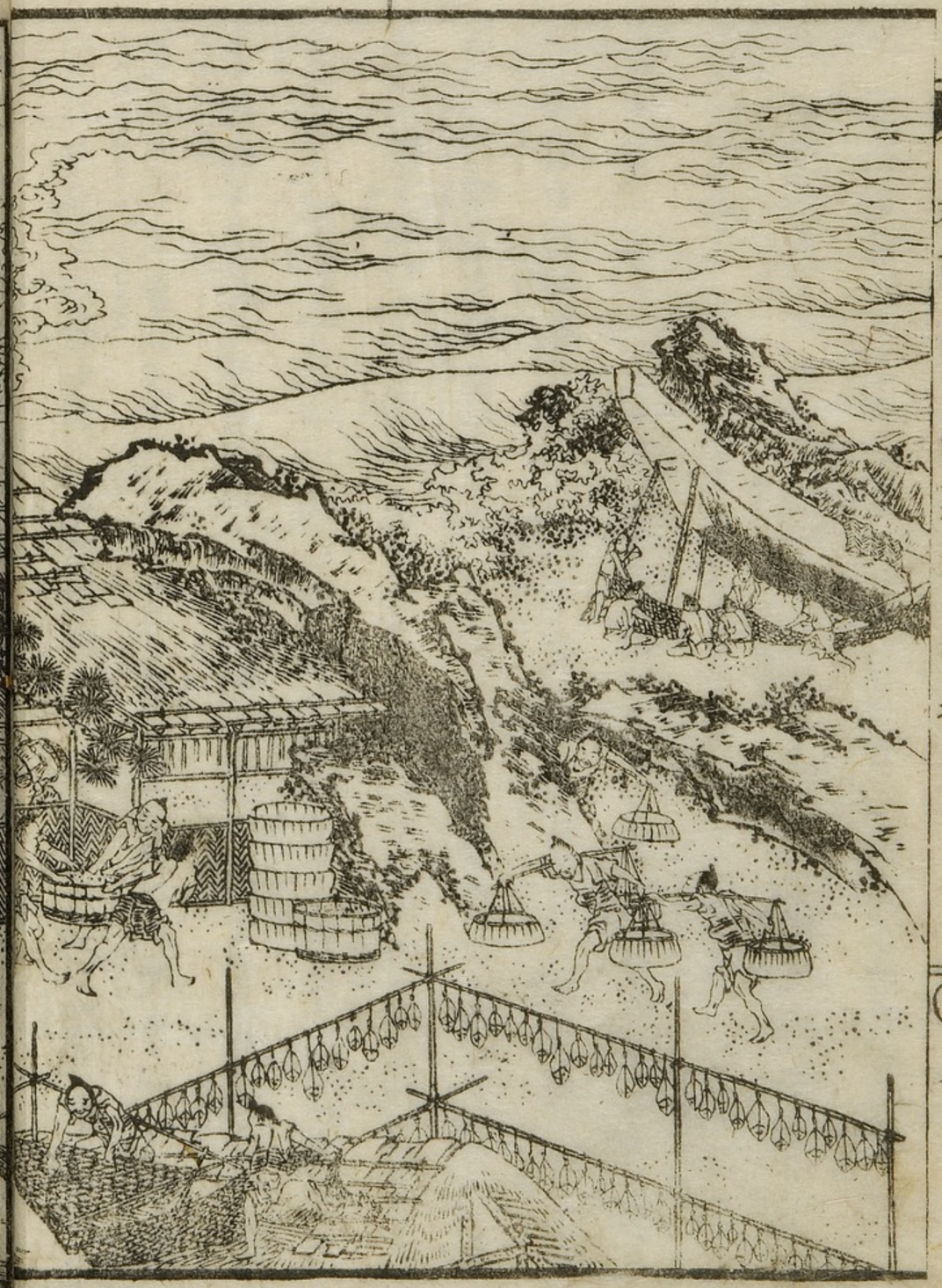
為朝王女ハ県志頭なる。松山の波をみすまして。舟いとゝいそがし。餓飢れ。進退究て立在るふ折うら。曙雲ク兵ホ駭出すまて。落人を捜捕ふと。ほふ声の耳邊よゆ。ゑゆ。ゑふ。公のこゝ猛一とゝいへども。力衰へ勢殫て脱ま果べうもとひあざりしに。誰とゝなくふに水際よ艘の舟を繋ぎ。蘆のうちよゝ忽然と。一艘の独木舟を漕よして。為朝夫婦をさし招ぬ。とく舟よめされよ。とゝいふよ。敵ク身方うちわうら稀ど。事急なるまゝ。問定ぬ及ぞ為朝ハ王女を扶ゐ壁ゐる足を踏運ゞして。舟も内ゑと

乗る人紅人驚て漕出そふ。その疾こと礫の氷の走るがごとく。忽地よ
き程へ一里ばかり漕ひけり。為朝も玉女も。ふしぎなりけるねが
彼船人ふうち對ひ。かゝる危窮の時ゝ臨て。ゆくりなくも救主に
過世の契あるこそ。抑何國いづくの人ぞ。名告まうしゝへと宣へば。
紅人いそぎ忙しく。楫をそめて舷ゟ踏躍し。別艘になりてようやく七手
になりてのくへ面忘れとまふなるをし。これを佳奇呂麻の嶋長る。
林太夫といふりのなる。按司浦夫婦のものゝまうりにて困めぐみ
ゐるゆゑ。神の告のふよりて快船ふうち乗りもん迎ひまふりこん。
その長拙酒なれば後おこそまうさゝれど。氣をこのいとゝ餓ゐゑ
えゝてまうまおまず齎したるおを。進ふしのりん。と信ふうちて。船底
より飯摂焼魚なんどをとり出し。亦紅酒一瓢をりて。そゝ先進

それば夫婦ゟ海月の骨にめぶこゝちして。嶋人ホが生平とされ
海蘊飯も百珍の美味ふいやまし只一瓢の村酒も甘露のごく覚ひ
たまふるべし。為朝かさゐて盃をあげ。さて王女ふ宣ふうこれ嶌
伐ゐて猛火ゐ裏れ。咽喉渇きさて堪がさゐ駿馬の鮮血を吸ひ
ゐた凡馬の肉を食ひしりの。そやく酒を飲ざれば。全身悪瘴を
發し。久しうふびして死とといくに水ぞして一七日の飢を忘れ
吸ーうば。今ふ心ゐ快かふびたうふの酒食ハ價千金。真ゐ崛山の片
玉なうこゝみる長が誠忠のいとゝ所忘るべうふびと宣へど王女そ
いうる長う厚た志を賞嘆し。七年已前佳奇呂麻ゐ。そび浮世
を潜びつゝ長が信ふ事の命を繋だおるされば。その面新を忘ほ

ぐうへわらはども。なほ疲れさうもなき事なれば。君もろともに外しく。その人なりとちさうさうと。恨なせそと。真実なうお賠話なくべ。林太夫いと忙しく。舳に著こ二十六嶋おわる中に。佳奇呂麻は都へ遠く。人影稀なる荒磯なれば。再びこゝに君御夫婦の先途を救ひまゐらする。欲しさは嶋夫が訛よりし身の長一丈あまり毛色。そこの櫓杭を。こゝも續こゝんやうあて。修験者めてる旅客。長が門ふまでいふやう聖有聖のこゝろ。為朝王女りうともに瞹雲が賊兵に囲られ。具志頭の東なる松山の依ふ到るをし汝ら急く私を出彼処ふ赴きてこれを救へといそがしこうり。と怪しかりければ。吾倩もそれく。名乃原何ホの人あそ何国よりまゐりしやうれぬ形容なうと回答をれお彼修験者点叱てこうふへ理りあり。これいと定て大日本。人皇七十五代の天子。崇徳院のおん使ありて。讃岐国象頭山よりまつりのなり。ゆり疑ひて事遅くせば。後悔こともあるべし。及びごけん。そやく沙汰。と催促そいよ〳〵怪しかことふぞうもあく〳〵私ど。誰か人〳〵て問ぐ。あゝ八郎按司ふ縁由と。告なるかりうんとおりふて。仰こゝろ奴てこゝそ修験者その回答へせで。「濱くれ音とのこぞなく。とこさらび吟じてかて消をこく失ふろ。こへ平幸ふあくびとそくへ。嶋人ホホ告こふそろに皇子只妻子にのこ此こくのこりありとやえこふし。俄頃ホ酒食を准備。糧米用水仏積入て。松生こてそのひーう。具志頭まで。海上百里ホあまれり。かる小紅そ


きのえ
嶺岐院の
神使
佳奇呂麻へ
天降る



ろふ翌の間ゐ到らんこと。公りとゆく岩ひろぐふ。遮帆めげて走らそろふ。殊さふに追風のよし。船のゆくことも平日にとぐれてきのふの黄昏ゐ松山の磯へ着くれとたいふ。夜明ぬれば夢のこころしらそ。さて舟司や在とたれ。王女や在そると項を長々ゐしてゐたり。人さめらぐ。そんはらなることかぎりなくれば。船を蓋の中に縮めゐ。里ゐ遠きて。大里の為体外なぐらゆくに長川大里山の敗軍に舟司も王女も撃れまひぬといふりのあり。げもも嶋袋のかくよ兵火を發りて。天をさまじく。煙の中に煽のおぐさく遠くくえそう。渉ましくも悲くくて只忙然と立在ぐふ。所注神の教ふまして。船ゐく行ま折ふまして君ゐ夫婦が岸よ立在追蒐る敵を見ゐ。分ゐ松山にきをかくことなえかくりまふ紙包なりけることえもふ。

ちふ雲の遥彼ゐ。まぐ彼和歌をゐ吟ゐ船漕はしてのと一五一十とりのかくれば。為朝これを聞もめくそ。その五ゐを救ハせまひくゐ彼濱衙の三十一字ゐ新院濱岐の松山ゐ在せしこえまぐくゐ五部の大乗経ゐ書写して都へたろいしまふとて。その詠じまふ御製ゐ。ちふ少納言入道信西が阻まふ恐しまよくて朝廷ぬくび貪淺ありて彼経巻とそぐまくに情なくも返されたり。さるご院の御怨ゐ日来ゐいやまして。天ゐ祈ゐ地ゐ祷り。魔界ゐ入て帝ゐ祝じえ。これゐ強顔ゐ奴ゐ。おりひちふせんと拡ゐ名ととろ仏くえれ松山ゐ為朝夫婦が呻吟ふを豫くもちひ

岩ひろぐふ。遮帆めげて走らそろふ。
殊さふに追風のよし。船のゆくことも平日にとぐれてきのふの黄昏ゐ松山の磯へ着くれとたいふ。夜明ぬれば夢のこころしらそ。さて舟司や在とたれ。
王女や在そると項を長々ゐしてゐたり。
人さめらぐ。そんはらなることかぎりなくれば。船を蓋の中に縮めゐ。
里ゐ遠きて。大里の為体外なぐらゆくに長川大里山の敗軍に
舟司も王女も撃れまひぬといふりのあり。げもも嶋袋のかくよ兵火
發りて。天をさまじく。煙の中に煽のおぐさく遠くくえそう。渉ましくも悲くくて只忙然と立在ぐふ。所注神の教ふまして。船ゐく行ま
折ふまして君ゐ夫婦が岸よ立在追蒐る敵を見ゐ。分ゐ松山にきをかくことなえ
かくりまふ紙包なりけることえもふ。
ちふ雲の遥彼ゐ。まぐ彼和歌をゐ吟ゐ船漕はしてのと一五一十とりの
かくれば。為朝これを聞もめくそ。その五ゐを救ハせまひくゐ彼濱衙の三十一字ゐ新院濱岐の松山ゐ在
せしこえまぐくゐ五部の大乗経ゐ書写して都へたろいしまふとて。
その詠じまふ御製ゐ。ちふ少納言入道信西が阻まふ恐しまよくて
朝廷ぬくび貪淺ありて彼経巻とそぐまくに情なくも返
されたり。さるご院の御怨ゐ日来ゐいやまして。天ゐ祈ゐ地ゐ祷り。
魔界ゐ入て帝ゐ祝じえ。これゐ強顔ゐ奴ゐ。おりひちふせんと拡ゐ
名ととろ仏くえれ松山ゐ為朝夫婦が呻吟ふを豫くもちひ

めされ。佳奇呂麻人を救せるふ。君恩いよも忍しと。匂を投やりて数回。
東のかことを拝しつゝ。王女も感涙禁めかたく良人の後方へ額著
る人へ林太夫も今更ゐ事著明ゐるこゝちして。共ゐ感嘆きりまれ。
當下為朝そ。やうやくに頭を擡去年利勇と洙しくたれそゞえより。
嶋彼あて曚雲に火攻せられ。馬の腹中に入くく猛火と避ようとゐ亦
王女も太里山の敗軍に。士卒戮殺し辛くく囲とを殺脱嶋彼あくく。
夫婦ひとつゐありめるはしを物うりる人へ林太夫をやく毎ふ。或へ
驚と或そうち歎き。或へ跡びて。こゝる呂神の擁護よくへせまゐより
こゝまゝのりしやうひをるとて行ふ。船へ亦二三里ゐようぞゝしてゐる。
為朝かさるて嶋長ゐ對ひ。そふの帰帆へ追風ふめふに汝何処へう船
をよせんとやふと問ゐ人へ林太夫答てさこん彼離せ前面ゐ雲の

ごとくえゝそうゐ。姑達佳津奇奴巴麻嶌伊計嶋といふ四ツの小嶋
ゐて巴麻嶌伊計嶋へ住む人もひろぞ今胥そこらく船と散望の
順風をまちてこそ。佳奇呂麻へゐん供つるそうひうんとい為朝
志うべくとて。その淺ふ徒ひのひ一ふ巴麻嶋を投やく漕わたるふその
夜亥の北及ゐ件の荒磯へ乗ゐうる。え耳船ゐへ齎しくれ糧も水も
あり人住む浴めふにとゐくへ岸ふのぼるも益ゐしとて主従三人。
揖を枕もして長て夜そゞうめるしゐくへ船代洗ふ浪の音のこ凄しくそ
睡ふんとそおふいも寝ふれぞ。やうやくに名代漏る昼の光りも為
くありて。そふ彼の際よりなけゆく隨ふ嶋山のかそゐ笛の音幽ゐ
ゆえそゝけて為朝枕を敲て。こゝへくに人なれ嶋ありとのゐ却の音せよ
そそろるゞし。あれいうもと訝多くへ林太夫も耳を側こゞこれを

うちゆきてそのあるところをたづぬるに。今より六七年のむかし。何処とも
もとりのみち程ど。仙人の在るとて。ときく人のいふのみにて。件の仙人
天よく晴られし日は鶴を駕り雲よはしこと十六の嶋〻をめぐりのみこと
ありこの嶋が彼仙のさすみ処ありんどうんさらばかゝる
人嶋ふ獣水遊山とるりの。めぐるべくもそのいろどといふ為なれを
ゆきて亦王女よむうひ。いうもそこよりまうでんみやこ仙人の集會
ところとて。ぬるくもあるもあらし。ちうふばかりも孤嶋なれども仙
境ゆふばといひがひ。値遇をえるものもあふ曠雲を拡破ったた
さもなりねべし。いざ訪ばやと宣へばうらうらもろともにたゝり倶しつゝ
とてりうさもに潮水ゆく漸き鮮血を塗れる。上の衣を脱捨て公
どうりへ袂襷一つ嶋長林をまをを分ーとぞ見て私をもぶし夫婦送ゆ
扶助られて巌ふ攀ぢ岸よ這のぼり。笛の音のするかたくとてあるこ
らふ。天へ既ふ明なんとて旭海よりうさし昇る隨ふ彼此をえうりまへど。
沙石へ梅花の散わるごとく。松柏へ龍蛇の蟠ゐ似て。浮世よ遠き住
境ゆり。彼流水ふ遡洞て。桃源ふ到りしもかくやとうひあしつゆふ。
何とゆく心清き體かうくして疲労を忘れ。足の運びもそむうたにや
嶋山の麓ふまゆまもり。さる程ふ。笛の音へいよ〻近く聞えて忽地山
本ゆる樹蔭より。ひとりの童子。横笛吹をさみたり。虫すゆ大さ
三歳駒よ等れ白鹿ふ清水汲入れりとおぼしく。瓢二ッを負し。時ゆふね
桃の花を折添てり。為朝も王女もこれ仙童ととえるみうふ。恭〻しく
むひをりて。おいひかけんとしるへば童子へ笛の音をとゞめて。莞爾
とうち笑とこ来つるりへ為朝夫婦ゆふびや。きのふの宣へ

せしことあり。翌年大里の按司八郎為朝その妻白縫王女をおひて治まることあるべし汝つゝがなくおいく為朝妹婿ゆゑ〳〵び残兵を聚て蠢雲ども滅さんとすべし直ゝ姑巴嶋へ推渡りて。その人を索よ。こゝなれ翼をおろゞし。もろ〳〵あれど。今茲ハ為朝四十三歳。もうも絶命遊年ゟ當れり。その星ハ計都ゐて。空在所巽の隅よりあり。いまご寇攻給べうべし。明年の春の季に至てゟ災謀ゟ大吉なり。按司功成り名遂ての後。これ必ゆきて相見めべし。今より六年と狂ふうんめハ八頭山の邊ゟお俟べしと。笑えもくせよと宣ひたかくてつゞ師を鶴ようち乗りそ。東海へ赴きのひ〳〵きのふの亭午ゟこゝそ。されがつゞ師ふこの海ふゆ〳〵ゟて。姑巴海へ渡りたまへといふ。按司もやく舊の紘ふかくりて。為朝王女そいまご各告もめへぞしてもくれーあて。ゑゝふう〳〵驚嘆

もて。まゐつても疑ゟ。真仙の教諭謹でうけゐりゆひぬ只道顔ゟ拝せざれを恨とするのゟ。抑ゝん身の師としのふ真仙ハ。往昔よりて。跡をこの嶋おとゞえまくる故願ゟくん道号を告ゟびしよまへかしと。宣へバ。童子微笑て。つゝ師のつゆハ忽卒ゐいひなにこれをえんがちのづゝ。曉るゆあるべしと回答つ。瓢ゐ挿ゟりて遁ゟせしゟば。為朝左右のまゐ受棒と。なほその故を問んとするゟ間ゐ。童子ハ鹿を牽いそびし左ゟなる茂林の中へ走り入るふ。その疾ことお追べうゟびゝ。忽地ゝえそなりふとゟびしゟれバ。夫婦ハ面をあにしつ。まそく奇異のそひをゐして同今童子ゟびゟれ。桃の枝をえるふよ香氣馥郁ゟる花僅ゐハ六英ありけて。下枝の花ハ六英ゆるゟ衰凋こ。上なる二ついまご開ゟぞ。ゆほうちかへりてゟびゆゟふさ〳〵ゆゟある短冊を

著ようさればこそと掌を受載て王女そもおこれをえずへ。
いおーへのためーもおひいろの海ふことふるの咄をえるうみ。
と陰文ある印ようける。為朝これを瀆果てうち驚て王女をえかへて。
是ハ此保元のころ。伊豆の大嶋ゆてうろ派せしおなり。このおよつきてそ。
くさぐのおかうあり。為朝配所ゆ往昔曽祖義家朝臣
金の牌はけて放ちまこーと話。忽然と飛まて。つろ傍よもり。この鵜そ
その已前古院の仰ようりて為朝潜ふこの國へ索まて王女ふ玉と掏ふる
りのも。ふるに彼ふ鳥羽院ゆて放生行れふりと笑え」ま。蒼海原ゆ
凌ぎまて。為朝が滴居を訪ふこと。
彼金の牌の裏お。

眠柳閑花遶水亭

仙禽再去還東溟

逢春便覺孤霞迥

清影何時照我庭

と詩句をさへ写しふり。ねーを誰とそ
牌ふ水を沃でうけて文字をふ紬へ
その牌へ件の和歌を書はけーに。
ぎて飛まりね。今ふ至て廿餘年。疑ひえて解ざりしお。そふふび奥号
にろ筆の迹をふるこそ奇特なれ。是彼ふひあろそれふ。扨そ
比ふ。この嶋ふ往来ーなれ彼ふ
なりといへ九皐に鳴て。天外ふ
よしをとふべふ。この短冊も白ふあて。さみづら扨の君ふご用ふ
扨ふりかれべーとふひふけ称と件の詩牋印ふれ袖そ燧袋の底ふ
おさえて生るふも入れふも。腰ふそ
ふろとなりふり。数箇度の窮難に


巴森嶋ゟ
爲朝
仙童ゟ
迎ふ

如ク失ひつれど曩ニ讃岐院の山陵ニ通夜せしに夢の中ニ感ル
ちゝ給ひし父が紀念の宝剣と燧袋ハ今にあり。これも亦奇といふべし。これ
ゆくといひつゝけて腰ニ佩ル。これ燧袋を掻捜ルに單の袖を出しゝゆゑへ
王女ハ袖ニ印しゝ給ひし詩を見ろ。和歌を見ろ。かくまで奇しき地縁
を目前ニ見て感報ふ久後ニ曾祖父家
朝臣の賜ふ天神地祇氏の神ゝら憐て。
後の栄とも思ひしかゝる倒を見ひづの海ニ鳥の跡を今。
亦この嶋ニ尚ゝる。君も信ありかく物触る奇瑞
仮れば。ゝく姑巴嶋へ到らせゝ
かし。誘ゆくとて為朝ハ先ニ
ゆゝゝ林太夫ハ忙しく船を
さゝはして。為朝王女と扶乗しゝまづゝ

のゆゝを問ふ夫婦を満顔ニ笑ひ
ゐる。詩歌のゝゝそゝてゝゝゝ。林太夫ハ只管
ふ奇なれゝる。と唱歎し。遂ニ
さんとゝる行ふ。ゆゝは愛ゝたい枝ニ
そゝえて。更ニ新ニ咲るがごとく。二ッの含ハ忽然と開て香氣ゝじめふ
いやはしゝゝこれも亦時ニ
ゐる。吉祥ふ仕るゆゝと王女ともニ林太夫
が壽河ゝまうせば。為朝ハ船ニ乗なゝゝ桃の枝をその儘ニ浪打際へ
楚と挿ゝれり。瞬雲ゝらゝ勝て中山山南北の三者ハ掃除ごと
あゝゝばこの桃永く栄ふをしと誓ひゐるこの所その
夕ゝり潮の退くこと数十町。大ゝ
巣をはしその長丈餘ふ及ぐりと後ゆいひりて侍ゝゝ。

第五十八回

孤鳥を射て神童兵を談ぜ　姑巴嶋ゟ父子再會を

却説佳奇呂麻の嶋長林太夫ハ巴麻嶌の磯を漕出して只管舩を走らすれ共水行の案内ハよくもらず西へくと揖ゟ前うりもなく走り忙の南ゟえゆる三ッの嶋あれや何処と問ふ人ハ東馬歯山西馬歯山亦西南にそえられ姑米山と答ふるしるさて中山を北ゟえて度那奇安根呢の嶋〳〵を浪の隙ゟ見れ小春の海の靜かにて神の導くが如く快舩ハ瞬うちふ數十里を半日ゟ程ゟ乗走ふしその日の未下刻姑巴嶋の磯へ着にけり。こゝも人なき嶋なれバ。舩の衛の友等ぶのこと岩うゑ浪のおのづ〳〵ゟはしもあ〳〵舩ゟ纜を投うけて為朝王女を岸ゟのぶしやう〳〵舩ゟ繋ぎ

とめて林太夫も後ひなるに小嶋あれと山ハ岩りて疊れてごく造化の工致あり。ゟれ松の琴。ひく潮と亦うちよする波の鼓もおうそろに腸と洗ふ佳境なり。されバ主従足引の山ゟ陟て溪ふ降りて入まバ桃の林あり四時をりく風うこもおぼしく花あり實あり含あり。香氣珠さ〳〵ふ異を穿て醉れごく。醒るがごとし羽容道士の葬やめると玉ちろにきのふ行ふ忽地讀書の声〳〵ちゟさゞれバこそとて主従三人点ぢあつて樹の間ゟつく〳〵と見入れゟ人ハ林の中ゟ人影して仙翁と仙童と只二人花を裡ゟ對てゆり翁ハ眉鬚皓く形ハ痩て枯松のごく骨逞して壮士ゟ似ず童子ハ髪ゟふり乱して年の齢ハ定うるべくもあらねどその声ハ十あまり二ッ三ッの上とゟそ

晴清く。眉秀脣朱ありて玲瓏たる辯舌いとも爽なり。ものくに木の
葉を綴りあしらひて肩と腰とをかざりたれど。礼譲を真実守りて。童子を却
衣のそのその隙よりこえうちおかくとく。
上座なる石の尻をうけ。翁ハ遥か下よりて彼童子がお読むを敬ひ
聞きて耳を側をりく難問をれてことあり。為朝ハうほおかくとく。
読書の声を孰聞て。ゆくく怪つ。王女の袂を引揺して。密かに
宜へやう。いふやゝありつゝん。不老長生を根として真と徐ゝ毋が練る。
道書ありべしとをひけるを。彼処ゟ流むハ兵書く往昔うら曽祖
義家朝臣大江匡房卿よりの受伝ありし訓閲虎之巻といふ兵学
の秘書ありし源家の嫡子相兼して兄義朝これ伝ありむ。もうおふ
平治の播乱ゟ義朝を懐ゝく東路ゟ赴ん尾張うち野間の
内海ゟて長田ゟ誅されるひぬ。と灰ゟ歩くのこその後ハ彼書何くのそ
ゟありや。あるよしなけれバそのまゝ。
童子が読書をきけバ。彼と足と相似うり。それ。あるねゝ。そでうる。耳語
ものをあらそびやありけん童子ゟハ一隊声をたうし蓋武羅ハ漢の樊噲
母の衣を得て。草の上ゟ佩出。
武羅ゟ和合緒あり。忠孝の誉四海ゟ溢れといふ。さるをそ
幅一尺上なれ右の緒を帝釈と名ばく。中を天上の緒と唱へ左の
上の緒を頭神と名づく。中央ゟ日月の二天子を表し。増長広目。持国
多門の四天を緑をりのもと。と讀くぜん。翁傍ようりられを難じく。
母衣ハ樊噲が母の衣を折て書よこえそぞ。されらん字ゟつゞりて説を設ゝるべし。或ハらゟ母衣を

毛衣ぐるの羽をりてこれを織る。今の羽織という名目ハ原毋衣より生ずるなり。これ矢石を避んため甲の上へ被ぐとなく。この説いづれぞやと詰ぢば童子ハ莞然と笑ひて舊説かくの如くいふぞ。

樊噲が盾の考る所なし。亦ぐるの羽をりて織るをという説もそれに似たり。これを負とて俗ふ仏ぐり。三代實録巻の十七清和天皇の貞觀十二年三月十六日戊辰従五位下。行對馬嶋守。小野朝臣春風。起請の二箇事と進る。その一ハ曰軍旅之備。帯刀在り。薄と雖助て以保衛。望請ふ調布保保衣千領。絁造り。以不虞ハ倣んとぞ。これが保衣ハ毛衣よりあらじ。且往昔毋衣と書。武羅と書。みなこと假字なり。保保武羅五音相通ぜり。故あるかなとぞ。此戎具唐山

ぬその名ぞとぞ。これ大日本の古実なりと辯舌秦こうくと答れば為朝これを竊笑て只顧ふ感嘆し。後生寔もおそるべし。かる小兒ぬ神童ありて兵学既ぬ古今に通ぜり奇なるかな妙なれるかなと頻ぬ稱濱志ろの人ぺ王女も吾を掉にくふ彼処ぬ翁ぇ小膝をそゝえ君が發明その説をきくべし。夫婦面をあはしまふ水戦して水中に入ぐぺいふぬせんげふ敵ぇ拉ぐの術ぬあらぢ。

そのとれい犀の法亦龍王の奇法ありこれぐふを豫こ彼をるこそ。ちうふばる水難を脱れぢじ。往時その名父えし天智の御宇ぬ藤の千方亦田融院の御時ぇ丹波千丈嵓ぬ塾りし酒顛ゞ類の魔縁のりの術ぬ輒く勝ちる術いうぬ。と同ぺ童子そうち怠ぢそれ〳〵ぬそ亦方便あり。鑪をりて太刀の目を揖通さしてこれを佩。弓羅密

孤雁出群勢ホ以下圖說兵録ニアリ

都婆阿跛帝那永莎賀。と神呪を唱左へ薙て砂ると云へ変化といふとも勢こゝにつきし。ときに五扁唱ふく。その間よりこれを見れバ妖精変化も隠れ匿るゝやうにぎ長蛇の陣時宜おもんて布設一騎も漏さゞるこれを好む勇将の下弱卒なし。或ハ孤雁出群勢。或ハ鳥龍翻江勢。提槍。騎馬勢。披身勢。撃剣。搶法勇を奮て堅を破て鋭を砕き立地ゟ離け敵の大将射て落さ前さゝれバかくのごとけんといひ捨て身ゟ起し傍ゟ立ゝれ弓に箭刻てきりくと弯固とゞ折しもあれ嶋鳥の桃子を銜て空中高く翔揚れを。ゆりうごかして兵と射る。矢壺たゞゝゞ諸羽ゟ

獲れて鳥を撲地と落ちるまゝく。射ふりく。と誉る人バ童子も翁も樹の蔭ゟ人あるごとをしてあれバうち驚きつゝ倩とこえてを見ハいこゝぶし何囲の人いづくの浦ゟ漂泊ものかをさゝも人あらじくそふ漠と晋との故事も笑まほしくのあれゝ。あるさへと呼入ゝて主従三人忙ゝく。桃林の中へそゝみ入ゝ。為朝礼儀を正くして童子と翁おうち数ひこれハ琉球山南省大里の按司夫婦のものなり。近属逆臣利勇を誅し。亦妖賊曚雲を攻殺て。務ゟ乗るとくも却這奴ゞ幻術ゟそかく。士卒盡く討死し。某夫婦ハ辛ゞて必死を脱れて佳奇呂麻なれ由縁のものゟ誘引を松山の海辺より。独木舟ゟうち乗りて。そゝふびも巴麻嶋よりむき

神仙の教ゐよんて更ゐらの処へ索ゑもれり願くゎ二位の仙君神変不測の眤をかへ〳〵吾倚を助て瞰雲を挙亡さし民の塗炭を救ひしなまへ先王尚寧才浅く慮足らずして佞人を重用〳〵妖僧蠱惑されて終ゐ国家を喪ひまへと。天孫氏の正流断絶そゑよ仰を祈る偏ゐ海容ありまへと叮嚀仏ところの処を琉球国三十六嶋の内ゐも志ふざりと。汝がいひはれど舩もかよわそ。浮世ゐ遠き嶋守ハさるものありこともあらふざりたといと外ふしくりのそろに翁ハあひし汐も回答そ。為朝をうちまもり。赤うち日鑒て赤ゐなれ眼底ゐ涙を含こ別ゐちりてより。僅七年にるさればそも主も家隷も潮風ゐ吹くろまれて汚ゐ垢づた。木の葉ゐを衣と。海帯を帯とし山の猿ゐもいやはゆて。昔の姿もなくなりねれば面忘れるふふふん。いふ吾君御曹司。八町礫の紀平治ふぬりのを。と名告もあへそ童子かりてそれ弓と捨さてハこの賓客を父君よまもせうと舜天丸ゐそれと携りよろつゐふるゐも同じきるゐも先ぞろハ涙の磯の洗ひ松根ハあふられて哀れ為朝も又王女も。そひうけ給べ喜ーさのあまれ鉄ゐおゝまの。命あり時ありて。ゆくすゑ相見ふれるぐ子の顔へふりかゝは額髪と掻あげてそ嘆息ー。亦紀平治とそんかくりつ。褒れも褒ゐ八町礫もりのゐはして老ふろ。こゐ舜天丸ゐあありそれよ叔も大きくなりねるね。これハ夢ゐあふざれ欤。也爰なるふべそもあれ。ゐぐとるゐも駿あり。同ぐきこともあれ。




桃源ふ
神仙
ふし
父子と
憐く

若くよりの恩愛の迷ひおこそと弓そりのやうみれそろりうえて。
おのあられをきれが又哀歎をまきまきふあふられうえこれをえうれな
らふもも王女ハ頭を揺ひうと長林太夫おそり著て只よ〳〵とのこ泣
たまへバ。林をまきて何の故とも。ふひうけ称ど哀れさのそれおもかくれ
仲秋十六日の風荒れて。稚君の御身砕け高間磯萩ホをはぢえと
志て後者ハ悉く。波の底ホ入りにられと紀平治ハ稚君ホ左ふまふる
くさし揚そ。打かくる浪をおともせそ且く泅てゆくしうよりべて後も
あふ潮ホ揺あげられ引もろさられ。力衰へ勢ひ竭て今へかうとおりふ
折うら大魚の背ホ助乗せられ。甚処ともふびなくふこの嶌へ

うき名てのひきこれハ高間磯萩が亡魂大魚よ馮て稚君を救ひまゐらし
うれおりと後ホふひあらせうめり。かく辛じてこの磯へ流ふ寃ぶ
稚君そいふの行ふ縛を解て。よびうくせどもそのうひるし悲〳〵ふ
又打をしく。懲ホ青海原を凌でてふ漂ひ名ふも紀平治ひとり
存命て。何うせんと躓跎〳〵泣うふ折うら。とうふびも神仙の冥助ふようて立地よ稚君蘇生まゐらし
けて。加之件の真仙。この嶋を稚君よまゐらし剣源家相伝の秘書
訓閲虎之巻を伝受し。この書久〳〵編蓬の中ホあしとこれこの子
のゐホ務めうり。これ為朝よ由縁あれりのそ汝紀平治効て舜天
丸をもり言武術文学を習はせよ亦固操〳〵の却をりく〳〵弓弧
造り心放ゆふな時をまこハ後に用れ不あふん親子の再會疑ふ

ぎょうぶ。これへろあよう他一嶋へうたるべ。と仰もめくを空中ゐのわり
ゐくり。今さうぶおりへハ彼真仙ハ巴麻嶋ゐ迹をとゞそ赤大殿をみすき
て。もの嶋へ去ゐふゐり。志ろ和ゐその北。この桃林の中ゐおいて大き
なる和らの羽と。金の牌を拾ひ得たり。この牌ハ康平年間八幡
太郎義家朝臣奥の蝦夷征矢を刻。鹿の角をりて製として第一の矢を伊勢皇太神宮
と祝ひ祀て。第二の矢を八幡太神宮とし第三の矢を阿蘇の明神
として。主従祈念懈らざ赤この林ゐ東へ指つれ桃の枝を折りて
弓とゐし藤蔓を弦うつてむ或ハれハ野駒大鹿ゐんどゐ木の皮絢
ゐしうるをゐ編ゐうみて。稚君ゐ騎射遠射を習ひ給ふ。赤
ゐるとゐハ。砂ゐ跡つけてまゐ
書籍をよく諳文武の両道を極めまへ。紀平治ゐどう及ぶ所ゐあらで。
その怜悧をこゝろなれバ。主従二人よるべなき嶋もとなるゐハ憂うらで。
いろの花ゐ大殿ゐ稚君を遍ゐまもるさで立地ゐ命をるとも恨をあじ。
只一言の仰をきろバ翌をもまたず四時ゐ恙ゐ子ゐ結ぶ桃ゐやく
とろひしへきのふゐなろぶ。
繁とゐる老ゐ玉の緒長うれと忠義の為ゐ惜む果敢ゐさえ孝賢
れにろあ。そひあまりて足ぐね言葉を。推も量らせゐふん。
と一五一十を物かたれ。儔罕なる忠臣のこゝにありともあり磯海の
濱の生の砂子をよみ尽くをとも。竭ねハ寔ゐ主従の奇縁とゝく
為朝ハちぐくこれを嘆賞し巴麻嶋ゐて獲うれ短冊と彼詩ゐ

字留られ。夜の袖をそり出して。その来歴を説ちらし。今紀平治がふ
ところ不よくこれと符合せり。彼神仙いうなれ故也。かゝ為朝と憐ふ
や。縁故ハ暁うけれどもそのよしありくうかゞひそれのそみて巴麻
嶋めぐ仙童うそびしられ。桃の小枝の八ツハ凋こ二ツを含ねる。
ちうほふその花ろうもふ。悉ち香をはしいづれも新お開くうてこれ
をこの嶋おまてとじめて暁る一旦凋〳〵六英の花を為朝夫婦林太夫
松壽鶴亀ホがうえみ象り。二ッの花ハ舜天丸と。紀平治お象れり只惜
むべきのハ高間太郎磯萩のこかくれバ松寿諸亀ホた再會せんも
疑ひなしとてそれふがうえさえぬ此くだりのありさまと告るえバ紀平治
も舜天丸と面をあはして掲焉た奇瑞を感佩ちうしが。ホ猶こうちち
去れ。身方の徒を呼彼と。数へるえと白縫とも。吾妹子ともいひ出ものぞ。

なとて佳ひのおされ。と同ゞホ舜天丸も。母君何処ホ在を。琉球王の
長女をりて。後妻おせしと宜へバ。母君を世ばきりたまふ。飽迄て
別〳〵契おあひ。ちふひえとうかゝし。同れ父の胸苦しさハ同ゝ
子ようなほいやませゞ。回答ふ彼つやうに。うち点ぢて嘆息。
往ホ肥の國を出しところ。これもその日の風難ホ脱ゑがくえしうは。
白縫を往古の。身構姫ホ対と比して。浪を披きて水府とありね。ちうれ
ども風波ハ止まらず。船ハ忽地反覆る。後の壮士数十人もの〳〵魚
腹ホ葬られ。こゝに至て為朝も。死をぐうしとおもけるふも。讃岐院
の神霊の擁護ホよりて琉球の属嶋ホ着。こゝに忍びを小琉球の嶋北ホて寧王女の必死を救ひ王子
ホ渇してちふびも大里の按司ホ封ぢられ心の外なる婚縁も固辞

にはしめく王女を娶り。夥の羊を狩くれども。人こそ住ねこのところも。
流球國の属島なれば。つゐに訪れもせざりき。時しありて父子再會の情を述。こゝに源家を
歎きのひそと慰めつゝ舜天丸を。つゞゝとうち笑て泣ゐたれば。又紀平治が忠義よりいさゝか
囓もらさず。薮衣の袖のいとゞしく別且なりしにつゞき。まぢ〳〵と見送りて。立ちし
七ッの秋なれば。人顔定ならぬ程ながら。父あれかしと凡生と」活る物。父あれかしと凡生と」活る物。父
母あり。毎年にこの嶋山の松は生育ち。鶴ぶみも巣こりる往ハ父母
暮ゝて鳴くふいうでうれ父をも認ふ。母をも認らざるゆゑの海の
吹荒ぶてうらくかうふ磯邨も友呼ぶ」呼ぶりのを。親とも。友とも。
家隷ともえ教ハ八町礫のこと頼む所ハ神仏の導たまひてこそ。

父ふも母もあれしものめそいろ比と果しなく澳と眺ゐて立ちうと。
朝日の新もつゞ國の天なりしく伏拝む神も仏も親の為命もうれ
墨なく世ゐし在せと祈ったる。神の恵ハありがら母ハ絶てあはし
ゆげとふちふね歎びの中に歎たと倍んとふこゝろ紅紫ハ何処ぞや。
波間を投て入りぬと。きけば今更朝夕よ目訓れし海もなつかし
そて。樹の間遠く伸めぐり伸なづれぞも潮けり。雲ゐ挟霧よ隔られ。
とぶかねもりひを卿よ。ゐくハ為朝もつゞ子のこゝろ。さこそあらめと。
推量てやよ舜天丸。悲歎そいと理なれど。母ゐしとて歎くべうぞ。
白縫元来烈女なれば。夫の為子の為ふ曩ゐ王女の危窮を救ひて。
魂これゐ憑うり。みづから白縫王女と稱そこゝ浮うれ説よあら
ぞされハ面影こそ些異なれ。ねのいひざゐ勇敢智慮を白縫ゐ

る雫とぐふことゑし。これをおん身が母ともこんよ。王女ハなごてそのいふ
ゐろね。日未雄くしたおさりげ物。注のこ母の情ゐふんやいひひゐし。
と激され忍びう祢つ。轉輾び。一声高くよゝと泣。あれや実のうゐ母
の。声かときけが舜天丸そ。王女ふ犇と携とつた。戸を浪ふ朽ふふ
そも魂魄この土おとぼほりて。由緒あれ人の體を借て。父の後妻と
なりまへばとてもかくてもつゐ母なり。るぞや只一言を惜こゝまひく
舜天丸とも。つゐ子ともゐれゐうねこの嶋山を数なゝぐ。おぢうくと
晴ふ遠き。海よう涼き産の恩。まご二七日の孝もはくさび大嶋ふ在
そときく。兄君のる。尾張なれ姉君のる。下野なれ朝稚君ハつゐ身
まご西も東も。志ふざゐしとい仮初ふ面あにしたまぢえもおぢ
えぢ。兄当歟めりゐ形かなき世のたぐとゐひ。志ふにちまね

舜天丸がこゝ泣を哀れと憐さば母ぬと名告ふしめひ祢。と卿こそで
更ふ咽咽ん袂をおぢく引摑そ。そのまゝ抱たよし。おん身が
恨ハ理となれど。りゑじめより母と名告ふば。面影認れる紀平治が。
実とせぞして疑ひの。ゑしそもなゝふえとおりふうら只涙のこちふり
落ていふべたるもいへざりゑれ。そも寧王女そそのはゞえおん身ろ
父の索ゐゑれ。詞をりて王ふ摑ようふ由縁もあれで魂ハ憑ようそ
志ゑや。志ふ種が咽ゝびこのお母顕ゑて。良人ふ奔眉仕りしより
親子ハ原足一世の契り。人死ゝて妻となれが過去未際とおるとい
いへど子ゆゑの闇を生ゑうえても迷ひくもふあゝとふあふだ
良人ふ子どでも歟をとらせど。こるほどくによれべありまなたう人ふ
福なゑい大嶋ゆて自殺せゝと。後ふ父ほる太郎為頼。さてハ又ゝが

腹ゑりし舜天丸ふそぐえようり。世ふあふび手ハ幾許。かぐろりの衣ゑりやをれとてが子ふ等しこれ羊庚の童が腰の縫あげも仏ふかくれ綻びの長ゑ別ま母短夜ハ祢ぶくぐであるとことをメかく。かくまでめくぐれ物おりふ母が歎たハ人ちふぬ荒砥ふひとりそを冊く紀平治が千辛万苦におりひ北まは數ならぐだその丹誠のかひありてげふ旃檀を二葉より。芳ーくあそ裏末ふ彷れ雲る鳳を卵の中より。その声諸鳥に秀とい人を。人迹絶これ島ふ生肩兵学弓馬を遠祖頼義朝臣ハ。をさく茅らぬもん者が本事。この父ふーてたいの子なり。曚雲を滅そりのハ舜天丸なぐぐ。そも誰そや武運ハ父ふも母ふも仰ふ久後ふぐ芭蕉布の糸の乱ゑとうちもきえ彷るの羽衣清潔く。浮世の民ま掩ひたく。

亀の齢ゑ十あまそ。あひして曽孫玄孫のほろ後まぐ栄よと。祝祢げどみはそくき木の拭ひあくねを涙奇り舜天丸ハ今さぐた。いとぐ安けれ言の多ふ濡れそぬぐび物いひちぶたまふ訣びこれおまそとことるし涙ともおさあ多人かと慰めるくべ紀平治ハ小膝を拍て感嘆し寔ふ王女のあん言舌。白癪昭ふ異ゑぐだ。面新さ人ふ似そ多りもり人ハ七年前の秋。一旦死これ親子主従ひとろふ袈裟こそ。不老の門なりと祝ーまうせば林をまも。千秋萬歳と稱り。舜天丸そこれをえて。倶ーたまくおふ誰母そ人と。向せるくべ為朝へうち烏呼て嶋長とほとり近く招れよし。あれハ佳奇呂麻の嶋長ふ林太夫とぬそりのなり。そじめ為朝彼島へ漂泊ーて嶋人ふる信せられそ。

後王女も鴟長が家をかくれて瞰雲が残毒を避ることあり彼瞰雲
とふりのいぬ此くくの癖者なり亦大臣利勇が奸悪松壽夫婦が詭亀
親子が忠孝を後世のも抱うくべし。あるお為朝が一昨の敗軍に相
従ふ士卒もなく夫婦ひろみ索あひて通霄道を走り牙もいとうく
久しく餓疲れて松山の磯ゐ立在賊兵ぬうひ生ろえうへれども儻ぐま
術なく進退既よ究まれ折うふ讃岐院の神霊告させうのふことと
ありとそ。この鴟長が豫てより船を件の磯ふよりて。それを俟れば
ふ忌諱ゐも窮難を脱れくのことなうび父子面のうとれことを知
うり。是併讃岐院の神助ゆ感激して神助と人の誠をもるかきものし
舜天丸ハ紀平治りうとも感激して神助と人の誠をもるかきものし
福なりとて叮嚀ゐ敘びゆえの人ハ林を夫ハおそるく。頭を掻て。

さそいふおう。腐をれぐく。小國の護を蒙る。荒夷お人となりてのへば
生れまゝにく起もちく称ど按司王女のおん為めん命もをしかくふ
とこそそひいなれ。それがもろうなれおのづ乙おごも誠をおのづう誠ゐ
あそ名将勇婦ゐ値遇ーまりかくれ圓居ま仕ること牙ひとろうで
ろぐ嶋の光をまとべくいとう信ぐちて回答ろう。さる程ゐ紀平治を
枝ろくなれ桃の子を。八ッ七ッうち落ーて為朝王女おそくめまゐし。
林太夫ゆもこれをそふしつそのとて為朝ハ石湧まて漱きまづ彼桃が
りそこ社の神を祀る。もぐし心中の所願ゆ念ーどろりて。舜天丸ゐ宮ふ
ゐう。桃ハ邪鬼を除くりのこ。その神代の巻ゐもええ亦風俗通ゐも
ありろうへ。えつべーろぐ待こる桃ゐ由て福を招けるの。これ瞰雲を
滅その前象なり。且この嶋ゐ伊勢。男山阿蘇の三社の神を祀りてし

こと究めそよし惜うみ。おん身いまごその舊をとふべし。夫烏ハ熊野權現の使者ぞ。されバ神武天皇の官軍。山路ふ迷入りしとき天照皇太神。八咫烏をかりて官軍をみちびかれことあり。その太神を祀てまもらなぞや一隻の桃を惜みて烏を射て落しうるいと不覚と諭しのべバ。舜天丸謹てうけまゐらせ。仰寔ふさるるなり。桃をかりて糧とそれバ。七年が間この嶋あて。ゑ盃の殺生しばらく休ふべし。父母のおん為とぶひなり。仕るなれ。されバ烏を射うとらくとも。緒羽を縫ふて傷けず且くこれを懲とのこと。今ハ放ちやるべしと回答つゝ。籠うる烏とり起しつゝ前を抜のくべ。羽ぐるみて。阿と鳴ゐづらものゐ捷む山路遥ふ飛ゆく烏を衆皆目送りて舌を巻き。頭を傾け。百歩の外ふ柳のまゆを穿つといふ養由基もこれハいうでまゐるぎと稱嘆それバ為朝もいとほることの純しく。

舜天丸微妙ぞかりゐり。弓箭りて國を治んりのハかくこそめれと只一言父の賞美ハ勿ふあまされ。舜天丸ようみ母紀平治そ。の惱廣く。おりふるべしかくて親子主従ハ花と席に圍ゆして七年以来の艱難憂苦琉球乱離の一條をいとあまやかくふひるふよ物ぞなれバそやタぐれて。えーふかうぬ月影も。燈燭をそ。るに似うり。至誠ハ実ふ神の如し。一旦零落しまくとも。求めぞして洪福あり。為朝の子孫王とゐり。武名とならしもうべるふぼや。

椿說弓張月拾遺篇下帙卷之一畢